

2021年 1月 30日

2020年度聖路加国際大学大学院
看護学研究科修士論文

急性期一般病棟での身体拘束最小化のプロセスにおける
看護師個人の変容過程

Perception and Procedure Changes of Nurses
for the Minimization of Physical Restraint
in an Acute Care Ward

18MN307

宮元亜希子

要旨

「目的」：急性期病院で身体拘束を最小化するためには、ケアを提供する看護師を組織全体で支えるための組織体制づくりが重要である。本研究は、①身体拘束最小化に向かうプロセスにある急性期病棟において、看護師個人が身体拘束を行わないという選択に至るまでの変容過程とその過程に影響を与えた要因を知ること、②身体拘束を行わないことを選択する看護師を、組織はどのように支援していくのかという問いへの示唆を得ること、2点を目的として実施した。

「方法」：質的記述的研究にて、急性期一般入院料1または特定機能病院入院基本料7対1の届出をしている病院で勤務をしている病棟看護師で、過去1年以上身体拘束最小化への取り組みを行っている病棟で勤務した経験があり、かつ主任、師長などの役職についていない看護師10名を対象としてインタビューを実施した。収集したデータから看護師が、「身体拘束を行わない」ことを選択するに至った経緯と、その選択を促進した要因、阻害した要因について記述し、時系列に分析した。聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を受けて実施した（承認番号20-A044）。

「結果」：看護師の「身体拘束を行わない」ことを選択するに至った経緯に影響を与えた要因のうち、「身体拘束を行わないという選択を促進した要因」は18件あり、個人要因と組織要因に分けられた。一方、「身体拘束を行わない選択を阻害した要因」は8件あり、個人要因、組織要因、環境要因と患者の要因に分けられた。「看護師の身体拘束を行わないという選択を促進した要因」のうち、個人要因の多くは、入職した後の身体拘束に関連した経験を示していた。その他の組織要因、環境要因、患者の要因は、経験を生む契機となったり、影響を増幅させたりしていた。また、研究対象者の語りを経験した順序で概観したところ、身体拘束最小化に向けた考え方や行動が変化したプロセスには、概ね類似した流れが認められた。

「結論」：本研究の結果から、看護師は、患者や家族とのかかわりを中核とした経験を持つことで動機を生成し、対応できる知識や技術を習得することで行動を変化させていることが示唆された。看護管理者には、スタッフの身体拘束に関連した患者や家族の言動と変化に対する気づきを促すとともに、看護師の身体拘束に関する行動に組織が与える影響を認識し、患者の安全を確保する環境の調整に向けた役割や、身体拘束最小化に向けた柔軟な人員配置を確保する役割が求められる。